The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Oppositeness and Relevance
Author(s)	Kurokawa, Naohiko
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26234
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕Oppositeness and Relevance（反対と関連性）

学位申請者　　黒川　尚彦

本論文では英語の「反対」という概念に関係する３つの表現、vice versa、opposite、on the contraryに関して関連性理論の枠組みによる分析を行った。本論文の目的は、それぞれの表現に関して、解釈の際に各表現が持つコード化された意味がどのように語用論的に処理されるのかという解釈プロセスを明らかにすることである。

本論文は７章で構成されている。１章は各表現の概説である。ここではそれぞれの表現の鍵となる例をいくつか提示することで、それぞれの表現を分析する意義を示すことを試みている。２章では、本論文が採用する認知語用論の１つであるSperber & Wilsonによって提唱された関連性理論を紹介している。各表現の分析の際に用いられる概念や用語などをこの章で紹介している。３章は「反対」という概念自体に関する考察を行っている。これまで言語学（英語学）で盛んに行われてきた反意語の研究の知見をもとに、命題レベルの「反対」を３つに分類し、「反対」が認識される際はそのうちのいずれかであることが示されている。また、ヒトは二者がどのような関係にある場合に、「反対」を認識しやすいのかに関する原則を提示している。４章から６章の各章で、vice versa、opposite、on the contraryの分析を行っている。４章はvice versaを取り上げ、この表現のコード化された意味を提案し、どのようなプロセスを経てvice versaによって表される意味が理解されるのか分析している。vice versaの解釈には「入れ替え」が関わっているが、これも広い意味で「反対」と見なされる。５章はoppositeに関する章である。この語は字義通り「反対」の概念を表す語である。そして、oppositeは形容詞（叙述用法と限定用法）、副詞、前置詞として用いられる。それぞれの用法により表せる範囲は異なるが、本章ではこれらを統一的に扱える概念（oppositeのコード化された意味）を提案している。また、oppositeはthe oppositeという形式で名詞句として働く。この名詞句としてのthe oppositeが解釈の際に（数学的）関数のように機能することを提示している。そして、名詞句the oppositeを含む定型表現、do the oppositeとthe opposite is trueの分析を行っている。これらは共起する語doや(be) trueによってthe oppositeの概念が調整され、独自のコード化された意味を表すと考えている。そして、その調整された概念に基づく解釈プロセスの解明を行っている。６章は副詞的談話連結詞のon the contraryに関する議論である。この表現はたいてい「S1. On the contrary, S2」という形式で用いられる。そして、on the contraryはS1とS2の間に反対関係があることを示すという機能を担っていることを示している。S1が否定文の場合、S2と反対関係にあるのが、否定文S1そのものである場合とその肯定形である場合があり、この違いを命題の帰属先の違いという観点から明らかにしている。さらに、この帰属先の違いによって、１人での発話“S1. On the contrary, S2.”の場合と２人による発話“S1.” “On the contrary, S2.”の場合の両方を区別なく統一的に扱えるということも示している。また、on the contraryのコード化された意味を提案し、それがどのように語用論的に解決されるのかも明らかにしている。７章は４章から６章の内容を簡潔にまとめたものである。以下で３章から６章に関する詳細を述べる。

３章の目的は、「反対」という概念そのものを明らかにすること、反対関係を見出す認知的な傾向を示すこと、命題レベルの反対関係が３つに分類できると示すことである。これまでLyonsやCruseをはじめ、語彙意味論の分野で反意語の研究は盛んに行われてきた。その知見をもとに命題レベルでの反対関係の特徴を明らかにすることを試みている。反対とは二者がある点において反対関係にあることを指す。つまり、反対は二者の間にのみ成立する関係であり、その二者にはある対立点（例えば、スケール）があり、決して任意の二者ではない。２つの命題間の反対関係の認識は、二者の存在と共有する対立点の認識に依存する。ここで重要なことは、二者が対立点という反対認識の基盤を共有しているという点である。反対という概念は際立つ違いに注意が行きがちだが、重要なのはその違い以外は似ているという点である。これは反意語の研究でも言われてきたことであり、反対には多くの類似点と数少ない際立つ相違点が存在している。このことをもとに、ヒトが反対を認識する傾向を捉えるべく、Principle of Minimal Difference and Maximal Similarityという原則を提案する。これは「相違が小さければ小さいほど、類似が大きければ大きいほど、二者の関係を反対と認識しやすい」というものである。これをもとに命題レベルの反対関係を３つに分類する。

第一に反意の反対関係（contra(dicto)ry opposition）である。これは語彙レベルの反対関係がそのまま命題に反映されたものと言える。ここでは反意（contrary）と矛盾（contradictory）を１つにまとめている。第二に極性に基づく反対関係（‘all-or-none’opposition）である。簡潔に、肯定と否定の関係のことである。第三は方向性の反対関係（vector opposition）である。これは、例えば、John hit Mary.とMary hit John.との関係である。前者の文はジョンからメアリーへの行為であるのに対し、後者はその方向性が反対の行為である。この３つは、われわれが反対関係を見出すときの認識パターンに相当する。

４章はvice versaの分析を行っている。vice versaは1970年にFraserとMcCawleyによって注目されたが、1997年Kayが認知言語学的分析を行うまで忘れ去られた言語現象であった。FraserとMcCawleyはvice versaの入れ替わる２つの要素の特徴を示すに留まった。Kayはこれに対し、語用論を取り入れ、入れ替わる２つの要素は発話状況から喚起される２つの参与者であるとした。しかし、In slimming, success tends to breed success and vice versa.という文はその反例となるだろう。本論文ではvice versaのコード化された意味を「E(y,x)を完全な概念表象にせよ」という手続き的意味として提案する。この手続き的意味を遂行する際、先行命題からE(x,y)（２つのスロットを持つ論理的含意）を想起し、xとyを入れ替えてE(y,x)を得ることとなる。xとyは任意ではなく、文脈想定Rによって関係づけられなければならない。このプロセスにおいて重要なことは、これが連続的に行われるのではなく、同時並行で処理されるという点である。というのも、vice versaに先行する命題からE(x,y)を導出する際、多くの論理的含意の中からどれを選ぶかは、２つのスロットx,yとの関係で決まり、x,yにはそれを関係づける文脈想定Rが必要となるからである。つまり、これらは相互依存的に決定される。このことから、vice versaの解釈が順序に基づく処理ではなく、同時並行処理によるものと言える。

５章では字義通り「反対」を表すoppositeを扱っている。はじめに形容詞、副詞、前置詞として使用されるoppositeを１つの概念で捉え、それを名詞句としてのthe oppositeに応用することでそれを含む定型表現do the oppositeとthe opposite is trueの分析を行っている。多様な用法を持つoppositeがコード化する意味を$\text{OPPOSITE}_{\langle wrt:a\rangle}(x,y)$と提案する。x,yは反対関係にある二者を指し、<wrt:a>は対立点を表す。形容詞としてのoppositeは<wrt:a>の値が文脈で決定されるのに対し、副詞は<wrt: POSITION>と物理的空間における「位置」に限定され、前置詞では<wrt: POSITION*>となり、物理的・非物理的空間における「位置」に限られるが、副詞の場合より少し緩い制約がかけられている。これにより、x,yの値が制限される。これは、対立点のスロット<wrt:a>によってOPPOSITEの概念が明確になることを意味し、その違いが用法の違いに反映されることを示唆する。名詞句the oppositeは$y=\text{OPPOSITE}_{\langle wrt:a\rangle}(x)$と関数的に表される。つまり、xを満たす値を特定することで「xの反対」を関数的に理解し、その結果がthe oppositeによって表される内容に相当する。また、do the oppositeの場合、doがプロセスを表すことから対立点がプロセスに限定され、そのコード化された意味は$\text{DO-THE-OPPOSITE}_{\langle wrt:\ process\rangle}(x)$と表される。the opposite is trueでは、(be) trueによってある命題が真であることが表されることから対立点は命題内容に限定され、そのコード化された意味は$\text{THE-OPPOSITE-IS-TRUE}_{\langle wrt:propositional\ content\rangle}(x)$と表される。このように、oppositeの多様な用法も定型表現も基本の概念を規定することにより統一的に扱うことが可能となる。

６章は副詞的談話連結詞on the contraryの分析である。この表現はFraser(1998, 2009)が述べるように、「S1. On the contrary, S2」という形式で用いられる。２人による対話でも“S1.”“On the contrary, S2.”となり本質的に同じである。そして、on the contraryはS1とS2の間に反対関係があることを聞き手に示す。Fraserの分析方法ではまず１人の場合と２人の場合に分けられ、前者はさらに自己帰属（self-attribution）と他者帰属（other-attribution）に細分化されている。しかし、２人による対話は本質的に他者帰属であることから、分析の手段として帰属の違いに基づく分析の方が妥当である。例えば、Harry is not happy. On the contrary, he is extremely depressed.という１人の発話では、S1とS2の帰属が異なると想定することができる。S1はメタ言語否定であり、このことはS1の肯定形が他者に帰属することを意味する。そして、この文は話し手に帰属するS2と他者に帰属するS1の肯定形に反対関係があることを表している。これによって、Fraserの「on the contraryにはS2によるS1の修正機能がある」という主張も包括することが可能となる。さらには、If you don’t take this medicine, you won’t feel better. On the contrary, if you take it, you will get better soon.のようなS1がS2を修正せず、しかもS2と反対関係にあるのがS1の肯定形ではなくS1自体であることも捉えることが可能である。on the contraryがS1とS2の反対関係を表すことから、そのコード化された意味は先のoppositeをもとに、$\text{OPPOSITION}_{\langle wrt:\ communicated\ content\ without\ attributors\rangle}(x,y)$であることを提案する。これはx,yは帰属を無視した命題内容（論文中では‘bare thoughts’とも呼ぶ）に制限され、それが反対関係にあることを示している。さらに本章では、反対関係は明示的内容（explicature）だけでなく推意的内容（implicature）で成立することもあり、x,yの値が語用論的に決定されることも主張している。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（黒　川　尚　彦）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	岡 田 禎 之
	副 査　教 授	加 藤 正 治
	副 査　教 授	神 山 孝 夫

以下本文は別紙のとおり

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　Oppositeness and Relevance

学位申請者　黒　川　尚　彦

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　岡　田　禎　之

副査　大阪大学教授　　加　藤　正　治

副査　大阪大学教授　　神　山　孝　夫

【論文内容の要旨】

本論文は、Ａ４判 250 ページに及ぶ英語論文であり、英語の「反対」という概念に関係する３つの表現、*vice versa*、*opposite*、*on the contrary* に関して関連性理論の枠組みによる分析を行ったものである。本論文の目的は、それぞれの表現に関して、解釈の際に各表現が持つコード化された意味がどのように語用論的に処理されるかという解釈プロセスを明らかにすることである。

本論文は７章で構成されている。１章は各表現の概説である。２章では、本論文が採用する認知語用論の枠組みである関連性理論を紹介している。３章は「反対」という概念自体に関する考察を行っている。「反対」という概念は際立つ違いに注意が行きがちだが、重要なのはその違い以外は似ているという点である。「反対」には多くの類似点と数少ない際立つ相違点が存在している。このことを基に、ヒトが反対を認識する傾向を捉えるべく、Principle of Minimal difference and Maximal Similarity という原則を提案する。また命題レベルの反対関係を３つに分類する。一つは反意の反対関係（contra(dicto)ry opposition）であり、二つ目は極性に基づく反対関係（‘all-or-none’ opposition）である。第三は方向性の反対関係（vector opposition）であり、この３つは、われわれが反対関係を見出すときの認識パターンに相当する。以下４章から６章の各章で、この「反対」概念の分類や認識の原則に基づいて *vice versa*、*opposite*、*on the contrary* の分析を行っている。

４章は *vice versa* を取り上げ、この表現にコード化された意味を「E(y,x)を完全な概念表象にせよ」という手続き的意味として提案する。この手続き的意味を遂行する際、先行命題から E(x,y)（２つのスロットを持つ論理的含意）を想起し、x と y を入れ替えて E(y,x)を得ることとなる。x と y は任意ではなく、文脈想定 R によって関係づけられなければならない。*vice versa* に先行する命題から E(x,y)を導出する際、多くの論理的含意の中から２つのスロット x,y の認定が必要となり、x,y にはそれを関係づける文脈想定 R が必要となるからである。これらは相互依存的に決定されるのであり、*vice versa* の解釈が同時並行処理によって遂行されることを主張している。

５章は *opposite* に関する章である。この章では多様な用法を持つ *opposite* がコード化する意味を OPPOSITE<wrt:a>(x,y)と提案している。x,y は反対関係にある二者を指し、<wrt:a>は対立点を表す。形容詞としての *opposite* は<wrt:a>の値が文脈で決定されるのに対し、副詞は<wrt: POSITION>と物理的空間における「位置」に限定される。前置詞では<wrt: POSITION*>となり、物理的・非物理的空間における「位置」関係が対立点とな

るので、副詞の場合より少し緩い制約がかけられたものと規定することができる。これは、対立点のスロット<wrt:a>に用法の違いが反映されることを示している。また名詞句 *the opposite*、動詞句 *do the opposite*、命題 *the opposite is true* に関しても基本の概念規定を利用することにより統一的に扱うことが可能となることが示される。

６章は副詞的談話連結詞の *on the contrary* に関する議論である。この表現は通常 “ S1. On the contrary, S2 ” という形式で用いられる。そして、*on the contrary* は S1 と S2 の間に反対関係があることを示すという機能を担っている。S1 が否定文の場合、S2 と反対関係にあるのが否定文 S1 そのものである場合と、S1 の肯定形である場合があり、この違いを命題の帰属先の違いという観点から明らかにしている。さらにこの帰属先の違いによって、１人での発話 “ S1. On the contrary, S2. ” の場合と、２人による発話 “ S1. ”“ On the contrary, S2. ” の場合の両方を区別なく統一的に扱えうるということも示している。*on the contrary* のコード化された意味は、S1 と S2 の反対関係を表すことから、先の *opposite* を基に、OPPOSITION <wrt: communicated content without attributors>(x,y)であると提案する。７章は４章から６章の内容を簡潔にまとめたものである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は現在あまり注目されることのない、先行文献やデータの洗い出しも不十分であると思われる「反対」関係を表す３つの表現を取り上げ、それぞれにコーパスデータの調査や母語話者へのインタビューを行うことで、語用論的な分析の必要性を主張し、それぞれの言語表現がコード化する意味をスキーマとして提示し、分析しようとしたものである。

vice versa の場合、Fraser や McCawley はこの表現によって入れ替わる２つの要素の特徴を示すに留まった。Kay はこれに対し、語用論を取り入れ、入れ替わる２つの要素は発話状況から喚起される２つの参与者とした。しかし、いずれの説においても *In slimming, success tends to breed success and vice versa.*のような文は十分に分析することができず、本論文が提唱する語用論的なアプローチの必要性が示されることとなる。

5 章では影山の *opposite* の語彙意味論的分析では説明できない具体例が多くあることを示し、様々な表現との組み合わせで登場し、品詞も様々である *opposite* という語の根源的な意味を規定し、これに基づいて名詞、形容詞、副詞、前置詞として生じる *opposite* の意味を統一的に記述しようと試みていることは評価できる。

また副詞的談話連結詞 *on the contrary* に関しては、Fraser がまず１人の発話の場合と２人の発話の場合に分類して、前者をさらに自己帰属と他者帰属に細分化しているが、２人による対話は本質的に他者帰属であることから、発話者の人数による区別立ては不要であり、むしろ帰属の違いのみに基づく分析が妥当であることを指摘している。例えば、*Harry is not happy. On the contrary, he is extremely depressed.*という単一話者の発話では、S1 と S2 の帰属が異なり、これが「反対」関係を認定する地場を形成していることが論証されている。

一方で、この論文にはいくつか問題も認められる。反対関係を認定する際に重要な役割を果たす ad hoc 概念の認定基準には不明瞭なところがあり、今後さらに精緻化するべく検討が必要であると思われる。また説明の道具立てに利用する概念説明が十分に整理されていないところが一部見受けられ、内容提示のあり方をさらに整理する必要も認められる。また、本論で用いられる implicature と explicature の設定についても、その区別立てには恣意的な部分も見受けられることから、今後も議論を深めていく必要がありそうである。

しかしこれらの問題点は、本論文の価値を大きく損なうものではなく、興味深い言語事実の指摘を豊富に含んだ本論文は博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。